

◇地域歴史社会の研究◇

歴史の事実に学ぶ ④6

— 裏社会今昔 —

元警視庁警視正で、現在、一般社団法人危機管理研究会（暴力団等に係る調査・研究）理事の中林喜代司氏にお訊きしながら展開する。

第一 なぜ、「暴力団・反社会的勢力」は形成されたのか？

幕末・明治の侠客「清水次郎長」は、文政三年（一八二〇）、駿河国清水（現在の静岡市清水区）の船持ち船頭の次男として生まれたが、母方の叔父にあたる米穀商の山本次郎八の養子となり、山本長五郎を名乗った。養父の死去に伴い一旦は米穀商を継ぐが、ふとした喧嘩で人を殺めた為、実姉夫婦に家督を

この時の次郎長の義侠心に感じ入り、これが縁で、法治国家となる明治維新时期、山岡鉄舟・次郎長の交流が生まれたと言われる。鉄舟の人格に感服した次郎長は、「私らの時代は終わった」と呟き、鉄舟は「これからは心を磨くときだ」と訓戒、次郎長は、富士山南麓の開墾事業に着手、また、茶の販路拡大の為に蒸気船が入港できるよう運動し、自らも、横浜との定期航路線を切り開いた。その他、県令の奨めによって静岡の刑務所にいた囚徒を地元の開墾に携わらせ、晩年には、清水市に医院を開設、英語塾を後援したという。明治二十六年、満七十三歳で病死した次郎長は、侠客・博徒から社会貢献者に転じた典型である。

中林氏は、次郎長の『呟き』とその後史を辿り「暴力団パワー」醸成の歴史的背景を知れば「なぜ：」が見えてくると説く。氏は、一九六二年警視庁入庁、一貫して暴力団等組織犯罪捜査に従事。広域暴力団対策官、国際

譲つて博徒となり、侠客として清水港に一家を構えることになった。慶応四年（一八六八）五月、東征大総督府から駿府町差配役を通して東海道筋清水港の警固役を任される。同年九月、清水港に停泊した咸臨丸の幕府軍全員が死亡した「咸臨丸事件」で戦死した乗組員の遺体を収容し、砂浜に埋葬したという。新政府軍はこの収容作業を咎めたが、次郎長は「死ねばみな仏にごさる。仏に官軍も賊軍もない」と突っぱね、翌年には「壮士墓」を建立したとされる。

静岡藩大参事となった旧幕臣の山岡鉄舟は、

捜査課長、暴力団対策課長等を歴任。その後、全国暴力追放運動推進センターに身を置き、大相撲、プロゴルフの暴力団関係遮断を担当。監獄法の全面改正に伴い刑務所の暴力団離脱指導強化を機に、服役組員の更生指導に当たり、暴力団の内情や組員の心情等の観察を続けている。斯かる実務経験の深い中林氏に構成をお願いし、以下に列記して頂いた。

第二 「暴力団パワー」が地域社会・業界を侵食する構図

一 「暴力団パワー」の源流

「暴力団パワー」の淵源は、貨幣経済の進展で江戸中期に専門化した博徒・的屋の組織暴力と検証される。江戸幕府の「ゆるい統治」と相まって、博徒は常設の賭場で金銭を差配、的屋は盛り場で市場を仕切り、親分子分の結束力でその縄張を確立、顔役的存在となつて、正に「出番」多き時代であつた。縄張を巡る抗争で実戦力を強め、組織暴力を保



毛利 宏嗣

（山陽歴史研究家）

持。その結束力、実戦力、差配力の威力は、各時代の要請に活かされ「暴力団パワー」となって醸成された。主な歴史的背景を時代別に列記する。

- ・幕末維新明治時代 〓 諸藩の警備力、村民一揆・自由民権運動激化事件の戦闘力
- ・明治法治国家確立時代 〓 商法施行 〓 博徒から転向、企業の株主総会攻撃・守護
- ・大正デモクラシー時代 〓 港湾・炭鉱・建設の工夫動員力、労働争議の制圧力
- ・昭和終戦混乱・復興時代 〓 焼跡地上げ・闇市差配・企業守護、政官民との癒着
- ・昭和高度経済成長時代 〓 勢力拡大、抗争激化、威力増長、「暴力団」の呼称定着
- ・平成バブル同破綻時代 〓 地上げ・損切り・差益金獲得・債権取立、ヤクザマネー

二 「暴力団パワー」の市民社会侵食の構図

- (一) 合法事業への侵食
「暴力団パワー」を背景に、表見的合法支

を占めるようになり、並行して企業や行政の隙を突く企業対象暴力や行政対象暴力を巧妙化させている。

第三 「暴力団パワー」がローリスク・ハイリターンを狙う構図

- 一 検挙・規制を逃れる主な動向
- (一) 「暴力団パワー」で間接的収益システムを構築
暴力団本体を隠し「暴力団パワー」を利用、特殊詐欺等各種犯罪組織を統制、暴力団関係企業・共生者・半グレを先鋭化、前面にシフト。
- (二) IT等新技術を駆使、犯行ネットワーク拡充
個人情報等を奪取、飛ばし携帯・固定電話転送等を利用、検挙リスクを少なく利益極大を狙う犯行ネットを構築。
- (三) ヤクザマネーを先行投資
「暴力団パワー」最強のヤクザマネーで先行

配を企図して、荷役、建設、産廃、不動産、金融、運送、派遣、海運、スポーツ芸能等の事業を侵食し、共生者（各界の専門家を含む）を獲得するなどして「暴力団関係企業」を形成する。

- (二) 反社会的勢力の形成
「暴力団パワー」の暴力性・知能性は、不当に経済的利益を追求する集団や個人、即ち「反社会的勢力」を形成させ、社会情勢に応じ、犯罪組織の統制や後ろ盾となって上納金システムを構築、組織犯罪を機能させている。近年、ネットでつながり「暴力団パワー」を巧みに利用、詐欺的ビジネスを展開する「半グレ集団」が台頭、警戒を要する。

- (三) 民事介入暴力、企業対象暴力、行政対象暴力
社会情勢の変化に伴い、「暴力団パワー」とそのイメージを効果的に使って、債権回収等紛争に絡む民事介入暴力が資金活動の中心

投資を図り、建設・飲食・風俗等事業を展開。

- 二 令和AI時代、「暴力団パワー」は増強か？ 消滅か？
- (一) 「暴力団パワー」が活かされる先は？
暴力団関係企業・共生者・半グレが、経済取引を浸透させる中で活かし、潜行マフィア型の新興勢力となることが懸念される。
- (二) 「暴力団共生者・関係企業・半グレ」等を感じするには？
「暴力団パワー」醸成の歴史的背景の分析に重ね、情報蓄積・AIプログラム化・暴力団排除条項リンク機能の高度化が求められる。
- (三) 暴排の究極は、離脱・就労対策

暴力団排除条項の実効性を支える上級審判決により暴排が促進。その正当性は「排除される不利益は暴力団をやめれば回避できる」と判示。いつでも離脱できる環境保護は社会の使命であり、それは「暴力団パワー」消滅につながる道筋となる。